

"PERIL MAGAZINE

8号 -なぜ、人はこんなに不親切なのか？

山田はるか

インタビュー：オーウェン・ルオン

翻訳：星野美代子

【1. このポートレートシリーズで、あなたは女性たちに、想像上の理想の彼氏像を描写してもらっています。そして、男装を通して女性たちを彼氏像変身させています。このシリーズについて、制作プロセスやそのコンセプトのアイデアについて説明して下さい。】

私は女装専門のフォトスタジオでスタッフもしているのですが、女装を好む彼らが「なりたい」女性像に対して違和感を感じ続けていました。異性愛者であるが故に女性への憧れや興味が強いと、男性目線から見た彼らなりの女性像を自ら成りきる傾向にあります。しかし、その女性像が世間とはズレている事が多いのです。当の女性から見たら、そんな女性には実際にはいない、街の中で明らかに浮いている、と感じるでしょう。実際に街に溶け込んでいない女装者を街で見かける事もしばしばあります。

そこで私は敢えて男女逆の事をしたらどうなるだろうかと考えました。女性が理想の男性像になりきる男装姿を。特に女性は容姿よりも内面的なものを重視する傾向にあるので理想のシチュエーションも含めて作品として発表し様々な方に観て頂くという機会を作りたかったのです。女性特有の細部にまで至る「妄想力」というものを、男性・女性問わず再確認をして頂きたいのです。

まず、彼氏（結婚相手）のいない女性にアポを取り、日々理想の男性像や男性とのシチュエーションを妄想したりしているかを聞きます。後日、その妄想物語・理想の男性の容姿などをインタビューをします。

妄想内容は彼女達の自由なファンタジーの世界なので、「現実ではありえない様なぶっ飛んでいる内容でもいいし、人には言いにくい内容でも何でもいいから」と優しく声をかけるようにしています。始めは照れもあり、妄想も細かくは話しにくいので、まずは好きな男性の容姿を入念に聞きます。段々と会話が盛り上がっていきますので、さりげなく妄想の物語の出だしを聞いていきます。

妄想は物語調になっていますので、「その後カレは何て言ったの？」などという間の手を入れていくと彼女自身も盛り上がっていき、妄想物語はどんどん細かく明確な内容となっていきます。実在する恋の話をしているかのように会話は盛り上がります。

後日、私はその文章を見ながら洋服をスタイリングしたりカツラを購入したりします。その妄想物語の中の鍵を握る場面をピックアップし、その場面に付随した構成で撮影する事を考えます。撮影場所なども。撮影内容が決まり次第、撮影を執行します。

まずボディメイクをします。私が用意した、レズビアンの方や性同一性障害の女性に向けて販売されているナベシャツという胸を潰すシャツを着てもらい、肩パットを三枚ほど重ねて付けます。上半身を平坦にするために、お腹周りにタオルを巻き、上半身から腰回りまでをなるべく曲線の出ないように仕上げます。その上から彼女達が理想のカレに着てもらいたい洋服を着ます。

ヘアメイクも私がやります。彼女達に表情やポーズの指示をする事もありますが、彼女達からしてくれる事もあります。私が指示するのは大抵、「脇をあけて」「がに股で」「股を広げて」などの男性らしさを求めるものです。

【2. それぞれの女性のストーリーは、この作品の重要な構成要素になっていると思いますが、作家として各ストーリーを組み立てること、また各画像に物語的な要素を付随させることの、こだわりとか、意図とかを説明して下さい。】

この作品は、モデルになる女性達との共同作業といっても過言ではないくらいに彼女達の意見、存在、今までの経験が核となっています。彼女達と私との女性同士の対話によって生み出された作品、というようなものです。各ストーリーも、約100%彼女達の頭の中から出て来たものです。それを小説風に書き直したのは私ですが、ストーリーの構成等はすべて彼女達です。

しかし、日頃している妄想とはいえ自分一人の頭の中で考えている妄想では少しあやふやなイメージだったりするので、インタビューの際に「その後、カレは何と言ったの？」など、誘導をするかのような質問をするように心がけています。最後に私自身の手で、彼女達のインタビューの内容を小説風に書き直します。読む人が話の世界に入り込みやすい様に小説風にしていきます。彼女達と観客の間に共感が産まれる事を念頭に置き、臨場感が伝わるように心がけながら文章を書き直します。

各画像に物語的な要素を含ませているのは、女性の方が男性よりも妄想の部分で物語性を含んでいる、と私が思ったからです。男女で分けて物事を決めつける事は好きではないのですが、傾向として男性の方が理想の女性像や好みの女性像といったものがヴィジュアル重視にあるのではないかな、と感じています。反面、女性は好みの男性等を挙げると「優しい人」などの精神的な部分を答える人が多いと思います。

【3. あなたの作品にとって、ジェンダー、妄想、パフォーマンスは、どのような意味で重要なのですか？】

私はジェンダーをテーマに作品制作をしたり、これからも一生、ジェンダーも創作のテーマのひ

とつにしていきたいという強い意志があります。幼少期から、「女の子だから」のような生まれ持った性別だけで決めつけられたりする事が嫌でした。男性陣からそういう事を言われるよりも、女性自身が見ず知らずのうちに女性という社会的役割に成りきっている、事が腹立たしかったのです。

以前は男性に負けたくないという意志むき出しでしたが、今は女性だけでなく男性達もジェンダーに縛られて生きているんだな、という事が少しずつ分かってきたので、男性への対抗意識はかなり減少しました。男性も女性もですが、小さい頃から根付いている社会の尺度というものが自分自身の可能性を狭めているかもしれない、という事に気づいていない人が多いようにも感じます。私は女性として生を受けたので、どうしても女性目線になりがちですが、女性の中でもあまり女性らしくない私から見た社会、というものを表現していきたいと強く思っています。

女性の「社会の尺度から見た女性的でないもの」を発信していきたいと考える私にとって妄想は初めの一步といったようなテーマです。話が少し飛ぶのですが、女性が自分自身のマスターベーションの話を気軽にできる世の中を目指している私にとっての第一歩なのです。最近では中村うさぎさんや湯山礼子さん本などで女性のマスターベーションについて書かれてあったりしますが、男性とは違って女性のマスターベーションの話はタブー感が強いと思います。実際に私が「してるよ」とう返答をすると「してるって答えた女性と初めて会った」などと言われる事もしばしばです。(ま、未だに私も恥ずかしい部分があるので勇気を持って言っているのですが。もっと堂々と言える練習をしなくては…) もっと自分らしく素直であればいいのに、とってしまします。

「生産性のない性」に対して世の中は冷たいと思いますが、女性が性に奔放だったりする例や女性がマスターベーションをする例に対しても、男性よりも冷たい視線を浴びると思います。そんな世の中を変えていきたいので、マスターベーションまではいきませんが、その初めの一步として妄想に着目しました。

【 4. あなたのポートレートは、現実逃避や完璧な他者への強い変身願望などが感じられますが、この点について少し話してもらえますか？ 】

私の中では、現実逃避という要素はないと思っています。現実逃避というよりは逆に、そこに表現すべき現実があるからこういう形になっているのだと思っています。現実と正直に向き合う事でこういう形になっていると考えています。

変身願望は強い方だと自分でも感じています。しかし、実存する人物になりたい・変身したい、などはなく、一種の特定のイメージになりたいという意志もありません。私の中であるのは、私自身の他者から見たイメージがひとつのイメージで固定されたくない、という強い希望はありません。

【 5. 次の制作は、どのようなものになりますか？】

この「男想」シリーズは地道に続けていこうと思います。最低50人分は制作したいです。まだ新作については検討中なので具体的な内容は決まっていますが、現在私が興味があるのは、いわゆる一般的な生活をしているごく普通の20代女性です。何を持って普通かは分かりませんが、自分軸がなく社会と遊びと恋愛に埋もれている女性たちです。私とは真逆の女性なので、未知の世界という感覚で気になる対象です。

ここ最近、大阪の飛田という地域に行ってきました。飛田には遊郭の一角があり、その在り方にもすごいカルチャーショックを受けてきました。どこにでもある風俗店とは違い、民家のように小さい店舗が密集しており玄関の扉があいてあり、玄関先に遊女の女性が一店舗に一人ずつ座ってお客さんを待ち構えています。その遊女はドレスアップし、白いライトに照らされながらショーウインドウの洋服のように商品として佇んでいます。その横に雑女と呼ばれるおばさんが、前を通る男性に呼び込みをします。遊郭の一带の周りは住宅街なので、普通に学生がその前を通りすぎたりしていました。女性性が売り物としての現場を生で見て、かなりの衝撃を受けました。もっと詳しく調べて、作品として何かアイディアソースになるのではないかと考えています。人の心に「気づき」をもたらす事のできる作品を制作していきたいです。